

「親」

私が住んでおります岐阜県土岐市は、濃尾平野の東部に位置しておりますので東濃地方と呼ばれております。低い山々に囲まれた盆地で、人々は小さい畑や田圃を耕して生活しています。この地域のお盆は、今年、7月に勤められます。お盆を迎える頃、なぜか亡くなりました母のことが思い出されます。

子どもの頃、学校から帰ると、母が必ずお寺の境内の草を取っていました。そのお手伝いをしていると、母が言うのです。「草は毎日毎日取っても、次から次へと出てくるね。心配事や苦勞も尽きることなく次から次へと出てくるよ」と。不安やなやみは、如来様の励ましだと言うのです。

夏の日、畑に出ていた母が夕立でずぶ濡れになって帰って来た時に、「悪いカミナリだね」と言うと母は言うのです。「私は濡れたけれども、この雨でナスもスイカもキュウリも喜んで大きくなるよ」と。私の見方が<sup>かわ</sup>転ると、同じ事でもまったく逆に喜べます。

秋、西の山に真っ赤な夕日が沈む頃、赤トンボが舞ってます。トンボの群れを眺めながら母は言うのです。「トンボの寿命は短いよ、でも一生懸命飛んでいる。お前も決して一人ではないよ。目の前の小さなことにクヨクヨせず、大らかに、ゆったりと今日一日を生きなさい」と励まされました。

冬は門前の麦畑で麦踏みをする。麦踏みを手伝う私に母は言います。「麦は踏めば踏むほど真っ直ぐに天に伸びる。失敗や挫折も教えに出遇うご縁だね」。今になり、母の言葉を思い出し、頭が下がり、手が合わさります。手を合わせ、お念仏申す私の中に、母のいのちが生きています。

野田風雪先生が

「救われるとは、煩惱の林の中に、チラチラと光が見えるようになる」と教えて下さいます。